

《書 評》

Richard Talbert, *Roman Portable Sundials:
The Empire in Your Hand*,

Oxford: Oxford University Press, 2017, pp.xxiii+236.

南 雲 泰 輔

ローマ人の時間意識にかんする従来の研究では、複雑で多様な様相を見せる暦に関心が集中し、日常的な時間の捉え方については、ローマ時代には日時計と水時計が用いられていたこと、しかしながら、それらの利活用の方は限定的で、測時機能も正確を期しがたいものであったと指摘されることが多い¹⁾。もとよりかかる傾向は、文献史料中での言及が僅少であることに一因があるが、そのなかでもアウグストゥスの日時計の経年変化による測時機能の不具合にかんする大プリニウスの指摘（『博物誌』第36巻15）や、日時計の種類や考案者にかんするウィトルウィウスの説明（『建築書』第9巻第8章）は貴重な証言である²⁾。しかしながら、古代ギリシア・ローマ世界において日時計は、「町中、日時計だらけ」というアエリウス・ゲッリウスによるプラウトゥスの引用（『アッティカの夜』第3巻第3項5）に幾分誇張したかたちでみられるごとく³⁾、相当数が製作・利活用されていたとみられ、事実、1970年代において既にS. Gibbsは紀元後4世紀に至る古代ギリシア・ローマ世界の日時計の現存256例をカタログ化したが、その数は、2013年の研究では約400例、さらに最新の研究成果では約500～600例にも及んでいる⁴⁾。

これらの日時計の大多数は固定型（fixed sundial）であるが、なかには携帯型のものもある。この携帯型日時計（viatorium pensilium, portable sundial）を、K. Schaldachは「古代の科学的装置のなかでも最も魅力的」と称したが、彼の作成したリストによれば、現在その存在が知られている25例（うち4例は逸失）は、いずれもローマ帝国時代から初期ビザンツ時代にかけて、すなわち紀元後1世紀から7世紀までのあいだに製作されたものと推定されている。その大きさは最大でも13.5cmほどの、いずれも掌に収まるほどの小さな測時装置で、形状は多様であり、円筒型や丸薬入れ型のほか、1755年にイタリア・ヘルクラネウムで出土した吊り下げ式日時計のごとくハムの形状を模した特異な例も知られている⁵⁾。

本書『ローマ携帯型日時計：掌のなかの帝国』は、かくのごとき特殊で、またそれゆえに興味深い遺物であるローマ帝国時代の携帯型日時計（のなかでも、さらに特殊な一群。後述）について、初の本格的な専論であり、刊行後は多方面に歓迎され、複数の書評でも概して好意的に取り上げられた⁶⁾。

著者 Richard Talbert は、1947 年イギリス出身の西洋古典学者で、ケンブリッジ大学コーパス・クリスティ・コレッジで西洋古典学を学んだのち、オーストラリア・クイーンズランド大学、カナダ・マックマスター大学を経て、1988 年から米国・ノースカロライナ大学においてウィリアム・ランド・キーナン Jr. 講座古代史・古典学教授として教鞭を執る。ケンブリッジ大学に 1971 年に提出した博士論文に基づく『ティモレオンとギリシア期シチリアの復興、前 344- 前 317 年』（1974 年）や、元首政期における団体（corporate body）としてのローマ元老院の構成・議場での手続き・諸機能を包括的に扱った主著『帝政期ローマの元老院』（1984 年）にみられるごとく博引傍証で知られる⁷⁾。1980 年代以後は、西洋古代史の基本歴史地図帳として邦訳もなされた『ギリシア・ローマ歴史地図』（1985 年）や、ポイティンガー図を再考した画期的な『ローマの世界：ポイティンガー地図再考』（2010 年）など、古代地理学史・地図学史の領域で指導的役割を果たしている。当該領域での業績は多数に及ぶが、とりわけ重要なのは、1988 年に Talbert がディレクターに指名され、最終的に 2000 年 9 月に出版された『バーリントン・ギリシア・ローマ世界アトラス⁸⁾』であろう。これは現代の国家に当てはめると 75 개국以上に及ぶ地理的範囲と、前 1000 年から後 640 年に至る時代範囲とをカバーした大型の歴史地図帳であり、古代史のみならず初期中世史・初期ビザンツ史にとっても不可欠な基本文献のひとつとなっている。さらに、表示範囲に物理的な制限を持たず、その意味で地理・地図関連情報を表示するのに最適であるといえる、インターネットを通じたウェブ上での情報発信にも積極的である⁹⁾。

さて、かかる著者のこれまでの研究履歴からすれば、本書の対象とする携帯型日時計は、一見奇異な対象のごとく感じられるかもしれないが、実は著者は既にいくつかの論文でこの興味深い遺物に言及している¹⁰⁾。本書の「序章および謝辞」（pp.vii-xiv）では、「マイクロヒストリーの学徒は、最小の物体でさえも、実に予期せぬ、そしてやりがいのある仕方である社会の文化とものの考え方を浮かび上がらせることがあるのだということを、鋭敏にも心得ている」（p.vii）という印象的な冒頭の一文とともに、ローマ美術史・考古学研究者 Paul Zanker の名著『アウグストゥス時代のイメージの力¹¹⁾』と本書を比しつつ、携帯型日時計を取り上げる理由を次のごとく説明する。すなわち、著者によれば、本書は、以前には結びついていなかった 2 つの要素を撚り合わせたものであるという。ひとつは先に触れた 1980 年代以降の著者の研究履歴にかかわるもので、『バーリントン・アトラス』のような古代の可視化作業、および、それによって喚起されたポイティンガー図研究のような地図またはその他の手段による世界観形成の研究であり、もうひとつは、長い伝統を持つローマ日時計研究において、無視されてきたか、もしくは知られていない日時計の一群について、測時機能に着目するような慣習的・一面的方法ではなく、それらに反映されている知的・社会的環境に着目して検討することである。この両者の結合から、地理的研究・世界観および日時計という、従来の研究においては著者が「驚きと失望」（p.ix）を感じたほどに不十分な扱いしか受けてこなかった両者の関係の考察が、ある特定の一類型——地理的携帯型日時計

(geographical portable sundial) ——を素材として試みられることになる。そして、かかる考察によって明らかにされるのは、著者の言葉によれば「緯度的視角 (latitudinal vision)」(p.xiii) に基づくローマ人の世界観である。

第1章「ローマ帝国における日時計とその位置づけ」(pp.3-18) では、本書の考察対象が、知られるところの少ない古代日時計のなかでも、さらに特殊なローマ帝国における地理的情報が刻まれた携帯型日時計という一類型に限定されることがまず述べられる。しかるに、かかる限定された対象を扱うにもかかわらず、本書は技術研究ではなく文化研究であり、携帯型日時計に保存された詳細な地理的情報を考察することで、製作者や使用者の地理的認識、すなわち「世界観 (worldview)」(=「自らの周囲の環境を可視化し解釈する全般的視野」, p.3) を描き出すことができると著者は主張する。本書は、ローマ帝国の住民が獲得し、頭のなかに入れて持ち運んだ、捉え難く多様な空間的心性を意味する「非公式地理学 (informal geography)」の研究に寄与せんとするものであるというのである。かくのごとく本書の射程を定めたくて著者は、ローマ帝国において日時計 (ὥρολόγιον / horologium / solarium / horarium) が製作・使用された環境について、3つの特徴を概観する。すなわち、第一に、紀元後2世紀のローマ帝国において、帝国住民のなかでも教養人と称しうる人びとは、ラテン語とギリシア語を理解し、第二に、その長短にかかわらず時間を計測・記録・統御することについて深く埋め込まれた伝統的関心を共有しており、第三に、昼夜や毎時のごとく短い時間を記録した装置は、公私双方の領域において普通にみられたという。次いで、かかる環境のなかで用いられた日時計の背後にある考え方について、古典期のギリシアからローマ世界へ伝承された簡潔かつ洗練されたものであること、また日時計を正確に使用するには緯度への注意が不可欠であることを指摘するとともに、携帯型日時計の種類 (大別して円筒型および丸薬入れ型の2種) と機能、使用方法を簡潔に解説する。

続く第2章「描写・記述された地理的携帯型日時計」(pp.19-109) は、本書のなかで核となる最大の章であり、全257頁のうち91頁分 (約35%) が費やされる。本章は、著者が「地理的 (geographical)」と形容する、1つ以上の地理的名称およびこれに関連する緯度が刻まれた16例の携帯型日時計を、現在は逸失した例も含めて配列し、それぞれにかんする情報を整理したいわばカタログであるが、配列に際しては著者独自の新しく実際の構成が採用されている。すなわち、名称と配列順の2要素を決めるにあたり、名称については発見地もしくは所蔵館に関連するものとし、後段での議論の便宜のために3文字の略号 (本書評では省略) を設定する。また、配列順については、発見地の場合は記録が無いのか、ごく簡単もしくは信頼しえないこと、また、製作年の場合は情報が極めて貧弱であることから、発見地・製作年ではなく初刊年代順を採用する。著者は、この配列順には、地理的携帯型日時計にかんする知識増加の速度を強調するとともに、新たな発見を混乱なく付け加えることができるという、2つの利点があると述べており、かかる工夫は多くの書評で好意的な反応を得ている。この配列順によって取り上げられた16例の日時計は以下の通りである。

1. ローマ（逸失，初刊 1741 年，ラテン語，製作年代不詳）¹²⁾，2. ローマ・キルヒャー美術館（初刊 1857 年，ラテン語，緯度刻字なし，180 年代半ば以降製作），3. メンフィス（逸失，初刊 1860 年，ギリシア語，320 年代以降製作），4. アクイレイア（逸失，初刊 1880 年，ラテン語，緯度刻字なし，製作年代不詳）¹³⁾，5. ウィーン・美術史美術館（初刊 1883 年，ラテン語，緯度刻字なし，140 年代以降製作），6. クレ＝シャトラール（逸失，初刊 1896/1898 年，ラテン語，製作年代不詳）¹⁴⁾，7. オクスフォード・科学史博物館（初刊 1900 年，ラテン語，製作年代不詳）¹⁵⁾，8. アフロディシアス（逸失？，初刊 1963 年，ギリシア語，320 年代以降製作），9. サモス（初刊 1969 年，ギリシア語，320 年代以降製作），10. 時間博物館（個人蔵，初刊 1977 年，ギリシア語，320 年代以降製作）¹⁶⁾，11. フィリッピ（初刊 1978 年，ギリシア語，4 世紀後半以降）¹⁷⁾，12. ロンドン・科学博物館（初刊 1985 年，ギリシア語，320 年代以降製作），13. ヴィニャクール／バルトークール＝レ＝ダーム（初刊 1985 年，ラテン語，製作年代不詳），14. メリダ（初刊 1997 年，ラテン語，3 世紀初頭以降），15. ロンドン・大英博物館（初刊 2003 年，ギリシア語，320 年代以降製作），16. バルカン（個人蔵，初刊 2012 年，ギリシア語，緯度刻字なし，86 年～320 年代製作）。

本章では，これらの地理的携帯型日時計について，所蔵情報，材質，寸法，出所と来歴，概要，製作年代，関連文献の各項目がそれぞれ簡潔明瞭に示される。分析や注解は次章以降に回され，基礎となる情報の提示が本章の主眼であるが，地理的情報を含む携帯型の日時計という一定の要件を満たした遺物の全事例を通覧可能にしており，本書全体のなかでも資料的価値が高い章である。概要の記述では，刻字された地名・緯度の翻刻に加えて，プトレマイオス『地理学¹⁸⁾』に記載された緯度が付記され，同史料との比較対照が可能となっている。また，16 例すべてについて写真（逸失した 3 例は挿絵），および，日時計に関連する範囲を概括的に示す地図（ただし 2. キルヒャー美術館と 4. アクイレイアの 2 例は除く）も提示される。掲載写真の撮影に際しては，RTI 技法（Reflectance Transformation Imaging）が活用された例があり，表面の深刻な損傷のため従来刻字が判読困難であった 2 例（5. ウィーン・美術史美術館と 15. 大英博物館）で解読が可能となったほか，肉眼では視認困難であった刻字や線刻が可視化された例もある。掲載図版はカラーではなく白黒であり，すべてが細部に至るまで充分鮮明というわけではないが，必要に応じて掲載された部分拡大写真や実測図（ただし，スケール・バーを欠いている）により補うことができる。

第 3 章「地理的認識と世界観」（pp.111-136）では，前章で提示された情報を基礎として，プトレマイオス『地理学』に記載された合計 6345 地点の地名および緯度・経度と比較しつつ，16 例の地理的携帯型日時計に刻まれた 115 地点の地名および緯度を，古代の教養人の抱いた「地理的認識（geographical awareness）と世界観」（p.111）の指標として位置づけて考察する。地名については，ギリシア語・ラテン語で刻字された携帯型日時計の両方とも，地名の表記法には均一性とともな省略表記・綴字間違い・格変化の非一貫性が指摘されるが，それらは教養人には大きな問題にはならなかったであろうことから，これらは広く一般

の人びとというよりも、まずもって個人の利用に供されたであろうことが推測される。また、地理的携帯型日時計に刻字された地名は、すべて地域名・属州名・都市名であり、山脈や岬、河川、湖沼のごとき地形的特徴や民族名などは一切登場しない。さらに、16例のうち6例はコンスタンティノープルの名を含むにもかかわらず、テトラルキア時代およびコンスタンティヌス1世時代の属州再編を反映する区分名（第1～属州、第2～属州のごとき）が欠落しており、その理由として著者は偶然・怠惰・意識的な拒絶の可能性を想定する。

次に、近年の研究でもまったく注目されていない（p.117 note 19）緯度について、大プリニウスの説明（『博物誌』第2巻182-183¹⁹）を引きながら、携帯型日時計の意匠上および機能上、緯度の概念は根本的な重要性を持つことが主張される。携帯型日時計には、1つの地点につき大抵1つの緯度が付される（緯度刻字のないものもある。また、経度は一切含まれない）。この点について著者は、かつて先行学説で議論されたごとく、緯度・経度に基づく世界認識を提示したプトレマイオス『地理学』を、携帯型日時計の製作者が直接参照しえたか否かや参照の度合い如何は確言しえないと留保しつつ、複数例（5例は確実、4例は可能性あり）での地名の列举に際し、緯度が組織原理として採用されたことは疑いないと述べる。そして、緯度の利用には北南／南北方位の世界認識が不可欠であるが、携帯型日時計の製作者がいずれの方角を念頭に置いていたかは不詳であること、携帯型日時計に列举された地名はより広く多様な地理的認識の一部であること、製作者は空間認識を組織化する基礎的手段として、ローマ帝国の属州を利用したことを指摘する²⁰）。そして、本章の結論として、緯度を伴う地名は、携帯型日時計の製作者側において、ローマ帝国全域に及ぶ世界観と同等の、確信を持った（このことは必ずしも正確であることを意味しない）空間認識を創造したこと、さらに、製作者が自らの頭のなかに入れて持ち運んだ世界観は、私的な装置としてはそれで十分なものだったとも主張される。

それでは、かかる私的な測時装置としての地理的携帯型日時計を、製作・所有・使用したのは誰で、その目的は何だったのであろうか。第4章「日時計製作の共同体」（pp.137-170）は、日時計をデザイン・依頼・購入したであろう個人について、彼らはどのような知識をいかに習得し、どれほどの目的を心に抱いていたか、知的・社会的アプローチから考察する。ただし、特定個人の名前に結びつく携帯型日時計や、これに言及した史料は存在しないため、関係する人びとや文脈にかんする情報は僅少である。このことを踏まえたうえで著者はまず、地理的携帯型日時計にかんする共有知識を利用していた、ローマ帝国全体にわたる「ゆるやかな共同体あるいは団体」（p.167）の存在を想定するとともに、この共同体の構成員にとって、「緯度的に（latitudinally）」思考する能力、すなわち、「緯度を、空間の視覚化・組織化の基礎とすること」（p.167）が重要であったことを主張する。

次いで著者は、地理的携帯型日時計の魅力はコンパクトさにあること、刻字された緯度が不正確であっても、所有者は日時計の機能上緯度が重要であることを知らなかったわけではないこと、刻字された地名一覧からはローマ帝国内外を広く認識せんとする努力が窺知しう

ること、原則として携帯型日時計の最も重要な目的は広範囲に及ぶ旅行中の測時であること、ただし威信財 (prestige-object) に過ぎなかった可能性もあることなどを指摘する。そして、所有者像としては、ラテン語文学作品を参照しつつ、墓石に日時計をおくよう希望したことで知られるトリマルキオ (ペトロニウス『サテュリコン』71²¹⁾) のごとき人物を、いくらかの留保を伴いつつ想定するが、これはありうべき可能性の域を出ていないように思われる。

さて、ローマ帝国時代の地理的携帯型日時計は、18世紀半ばの出版以後に初めて世に知られるようになったのであり、より多くの例が出版された19世紀末には、日時計の生産そのものが終わりを迎えていた。それゆえ、ローマ携帯型日時計とそれ以後の測時装置とのあいだに直接的な影響関係はないことになる。この点を踏まえたうえで、第5章「ポスト古典期の比較事例」(pp.171-190)では、5世紀におけるローマ帝国西部の政治的崩壊以後に製作された、ローマ時代の携帯型日時計と比較可能な諸特徴を表していると考えられる種々の測時装置 (アストロラーベ、小舟型日時計 (navicula)、レギオモンタヌスの日時計、ニュルンベルク日時計、スコットランド石製日時計、20世紀以後の日時計・腕時計) が考察される。本章の末尾は、「私たちは、まずまずのところ、ローマ人の所有者たちは、まさに今日の時計愛好家と同じような理由で、自らの地理的携帯型日時計を尊重したと想像しうるのである。それゆえ、現在と同じように、これらの理由の射程は、単に時間について語ることを遙かに超えて広がっているのである」(p.190)と結ばれるが、かくのごとき一見興味深い比較作業や展望が、著者の問題とするローマ帝国時代の地理認識や世界観の問題に対し、いかなる意義を持つのかは判然としない。

補遺「アクインクム断片：日時計製作者の手引書か？」(pp.191-201)は、アクインクム (ハンガリー) で出土した2～3世紀のものとされる大理石片について、RTI画像を利用して再解釈を試みる。そこには携帯型日時計と類似した地名の刻字と線刻がみられ、ローマ時代の日時計製作者用のための「作業用手引 (working manual)」(p.200)であった可能性が指摘される。巻末には、第2章で取り上げられた16例の日時計に刻字されたすべての地名の位置一覧と、それらを示した地図3枚を付す「地名集 (Gazetter)」(pp.203-213)、「緯度・位置一覧表」(pp.214-220。ただし、2. ローマ・キルヒャー美術館、4. アクイレシア、5. ウィーン・美術史美術館、16. バルカンの4例は、緯度の刻字がないため不記載)、「参考文献一覧」(pp.221-230)、「索引」(pp.231-236)が付される。「索引」は図版解説も含め詳細かつ丁寧に作成されているが、「緯度・位置一覧」はページ番号が振られていないためか対象から外れている。

本書は、ローマ日時計全体を対象とした研究ではなく、そのなかでも携帯型の、とりわけ著者が「地理的」と形容する、極めて限られた対象に焦点を当てたものである。多様な形状を呈する地理的携帯型日時計は、それ自体が純粋な好奇心を喚起せしめる魅力的な遺物であるが、かかる特殊で類例の少ない測時装置の精妙な検証をもとに、通例想定されるごとき

ローマ人の時間意識を問題とするのではなく、遺物に刻まれた地理的認識や世界観を究明せんとする著者の企ては、ローマ帝国時代における世界認識の表出方法の独特さを読者によく窺知せしめる。その意味において、副題の「掌のなかの帝国」は、かかる地理的携帯型日時計の特徴と著者の主張とを的確に要言するものとなっている。

著者による地理的携帯型日時計についての考察は、この遺物にかんする限り確かに包括的なものではあるが、「ローマ人の言葉には、純粹に時間について正確な人の特性を表す形容詞もしくは名詞は存在しない²²⁾」といわれるような時間におおらかな社会のなかで、固定型ではなく携帯型の日時計がなぜ必要とされたのか、そして、ローマ人の抱いた緯度に基づく地理的な世界観は、なぜその表現媒体として特に携帯型日時計を選択したのか、またこれは著者の関心外かもしれないが、ローマ人の時間意識そのものとはどのような関連を持っていたのかなど、関連史資料の絶対的な不足ゆえ考察が困難であろうことが予想されるにもかかわらず、将来への課題は数多く残されているように思われる。特に、著者が16例の地理的携帯型日時計の考察から剔抉したところの、世界を緯度によって把握する「緯度的」な世界観は、著者の論に拠る限りローマ帝国における世界把握の一つの手段あるいは表現たりえた蓋然性が高く感じられるが、この特殊な遺物が所有者の個人的な興味満足のために、すなわち著者も可能性を指摘するごとく一種の威信財として製作され、富裕なローマ人の戸棚のなかに宝物とともに収められる類のものであった (p.169) 場合、著者が解明せんとするローマ人の世界観を表現する媒体として、携帯型日時計はどこまで適切であったかというのだろうか。

この疑問は、本書では直接の考察の対象外とされた固定型日時計や「地理的」でない携帯型日時計との相互関係如何の問題にも繋がる。ギリシア・ローマ日時計のデータベース the sundial database によれば、2019年10月現在で知られている日時計の数は、前3世紀は54例、前2世紀は88例、前1世紀は124例、1世紀は148例、2世紀は93例、3世紀は82例、年代不詳は537例あり、それらの大多数は固定型である。著者は、固定型日時計が身近にあった人びとは携帯型のその価値も認めたであろうと推測するが (p.165)、大理石や石灰岩、砂岩など多くが石製である固定型日時計と、骨製もしくは青銅や真鍮など金属製である携帯型日時計²³⁾ とでは、材質の違いから工程や製作者、彼らの属する職種や社会的地位は異なるであろうし、固定型日時計で地理的情報が刻まれている例も本書では取り上げられていない²⁴⁾。さらに、従来固定型であったものが携帯されるようになったとき、そこに地理的情報が刻まれる場合とそうでない場合という区別が生じた理由も詳らかでない。ローマ人の地理的認識・世界観という文脈のなかに地理的携帯型日時計を位置付けるといふ著者の試みが画期的であることは疑いないが、それは同時に、この特殊な遺物をギリシア・ローマ日時計一般の文脈のなかに再配置した場合の評価にかんする説明も要請するのではないかと思料する。

なお、ロンドン科学博物館所蔵日時計 (第12例) が内部に持つ歯車装置は、製作年代や

想定される製作目的の相違のためか本書ではほとんど触れられないが、それ自体に数々の難題を含むいわゆる「アンティキティラの機械」との関連をも想像せしめるところがあつて興味深い²⁵⁾。

註

- 1) ローマ時代の暦については、J. ド・ブルゴワン『暦の歴史』池上俊一監修、創元社、2001年、45-69, 119-120頁；島田誠「ローマの暦」地中海学会編『地中海の暦と祭り』刀水書房、2002年、96-99頁；A. ボルスト『中世の時と暦：ヨーロッパ史のなかの時間と数』津山拓也訳、八坂書房、2010年、32-42頁；K.-W. ヴェーバー『古代ローマ生活事典』小竹澄栄訳、みすず書房、2011年、212-218頁；片山真人『暦の科学』ベレ出版、2012年、20-29頁；L. ホルフォード＝ストレブンス『暦と時間の歴史』正宗聡訳、丸善出版株式会社、2013年、41-49頁；島田誠「古代ローマの暦」岡田芳朗編『暦の大辞典』朝倉書店、2014年、102-120頁。古代ギリシア・ローマ世界の時計全般について、古いが詳細な説明として、H. ディールス『古代技術』平田寛訳、鹿島研究所出版会、1970年（原著1924年）、150-213頁。簡略には、ヴェーバー（2011）401-403頁。日時計一般について、荒川紘『日時計＝最古の科学装置』海鳴社、1983年。簡単な歴史の概観を含む技術的観点からの解説として、上原敬二『日時計と日照』加島書店、1960年；関口直甫『日時計：その原理と作り方』恒星社厚生閣、2001年。ローマ人の時間と時計については、A. アンジェラ『古代ローマ人の24時間：よみがえる帝都ローマの民衆生活』関口英子訳、河出書房新社、2010年、77-80頁；ヴェーバー（2011）230-233頁；阪本浩『図説地図とあらすじでわかる！古代ローマ人の日々の暮らし』青春出版社、2011年、70-73頁；新保良明『古代ローマ人のくらし図鑑』宝島社、2012年、140-141頁；樋脇博敏『古代ローマの生活』角川文庫、2015年、300-303頁など、披見しえた限りでは一般向け解説が多くを占める。そのなかで、ローマ帝国における日時計と暦のケース・スタディとして、志内一興「イガエディタニ人に贈られた日時計：ローマ帝国における「とき」の問題」桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム：空間・ネットワーク・文化の交錯』山川出版社、2010年、154-183頁。
- 2) 中野定雄・中野里美・中野美代訳『プリニウスの博物誌〔縮刷版VI〕』雄山閣、2013年（初版1986年）、1467頁；森田慶一訳『ウィトルウィウス建築書＜普及版＞』東海大学出版会、1979年、231-262頁。後者については、S. Gibbs, *Greek and Roman Sundials*, New Haven / London, 1976, pp.59-65, 105-109.
- 3) アエリウス・ゲッリウス『アッティカの夜1』大西英文訳、京都大学学術出版会、2016年、193-194頁。
- 4) Gibbs (1976) pp.119-394; A. Jones, Introduction, A. Jones ed., *Time and Cosmos in Greco-Roman Antiquity*, Princeton / Oxford, 2017, p.28. cf. R. Talbert, *Roman Portable Sundials: The Empire in Your Hand*, Oxford, 2017（本書）, p.5, note 9; K. Schaldach, *Measuring the Hours: Sundials, Water Clocks, and Portable Sundials*, Jones ed. (2017) p.92 note 1. 現在は、the sundial database (<http://repository.edition-topoi.org/collection/BSDP>) においてデータベース化されている（2019年10月時点で、782例が掲載）。
- 5) Schaldach (2017) pp.63-93. 「最も魅力的」：Schaldach (2017) p.83. 現在知られているすべての携帯型日時計一覧：Schaldach (2017) p.91 table 1. ただし、後註13も参照。ヘルクラネウム出土ハム状携帯型日時計：ディールス（1970）180-181頁；Jones ed. (2017) p.83, p.85 fig.III-16.
- 6) 書評：A. Riggsby, *Bryn Mawr Classical Review* 2017.09.56; J. Draycott, *Journal of Roman Studies* 108, 2018, pp.245-246; A. Jones, *Classical Philology* 113-2, 2018, pp.232-237; C. Kostopoulos, *Museion* Ser. III, 15-1, 2018, pp.162-165; J.P. Oleson, *Portable Sundials for Travelers: the Empire's Geography for Intellectuals*, *Journal of Roman Archaeology* 31, 2018, pp.717-721. 一般向け紹介：C. Gruzeliier, *Classics for All*, 2017 (<https://classicsforall.org.uk/book-reviews/roman-portable-sundials-empire-hand/>); M. Bartels, *Early Tech Adopters in Ancient Rome Had Portable Sundials*, *smithsonian.com*,

- 2017 (<https://www.smithsonianmag.com/innovation/early-tech-adopters-ancient-rome-had-portable-sundials-180962225/>)
- 7) R. Talbert, *Timoleon and the Revival of Greek Sicily*, Cambridge, 1974; R. Talbert, *The Senate of Imperial Rome*, Princeton, 1984. 後者はアメリカ文献学協会 Goodwin Award of Merit を受賞している。Talbert の業績について: L. Brice & D. Sloatjes, Chaps and Maps: Reflections on a Career with Institutional and Geographical History, L. Brice & D. Sloatjes eds., *Aspects of Ancient Institutions and Geography: Studies in Honor of Richard J.A. Talbert*, Leiden / Boston, 2015, pp.3-11; T. Elliott, Cumulative Bibliography of Works by Richard J.A. Talbert, L. Brice & D. Sloatjes eds. (2015) pp.12-25.
- 8) R. Talbert ed., *Barrington Atlas of the Greek and Roman World*, Princeton, 2000. 『バーリントン・アトラス』とこれに結実した古典古代アトラス・プロジェクト (Classical Atlas Project) について: R. Talbert, *Challenges of Mapping the Classical World*, London / New York, 2019, pp.113-187. 『バーリントン・アトラス』に先立つローマ世界地図製作の試みとして、それぞれ 20 世紀初頭以来の蓄積を持つ「ローマ帝国全図 (Tabula Imperii Romani = TIR)」プロジェクトと「ローマ世界略図 (Forma Orbis Romani = FOR)」プロジェクトの成果も重要である。前者 TIR については、F. Adams, Tabula Imperii Romani: A Map of the Roman Empire based on the Carte Internationale du Monde au Millionième, *American Journal of Archaeology* 58-1, 1954, pp.45-51; R. Gardner, The International Map of the Roman Empire, *Geographical Journal* 139-1, 1973, pp.107-111; A. Rivet, The Present State of the Tabula Imperii Romani, *Journal of Roman Studies* 74, 1984, pp.200-201; J. ブラック『地図の政治学』関口篤訳、青土社、2001 年、199 頁。この両者は、2004 年に TIR-FOR (<http://tir-for.recerca.iec.cat/>) として合同し、2014 年以降はローマ帝国全体の地図のデジタル・データベース化を行なっている。これらを含め、19 世紀以後の古代世界歴史地図製作史の概観は、R. Talbert, Mapping the Classical World: Major Atlases and Map Series 1872-1990, *Journal of Roman Archaeology* 5, 1992, pp.5-38; Talbert (2019) pp.69-109.
- 9) 彼の主導で 1996 年に開始した「ノースカロライナ大学古典古代地図プロジェクト」は、現在「ノースカロライナ大学古代地図センター」(<http://awmc.unc.edu/wordpress/>) に継承され、古代史研究の文脈で、地図学・歴史地理学・地理情報科学が推進されている。また、Talbert (2010) の関連サイトとして、<https://www.cambridge.org/us/talbert/> がある。なお、評者は南雲泰輔「クルスス・プブリクスとボイティンガー図: 後期ローマ帝国時代の街道とその図示」『歴史学研究』950, 2016 年, 147-155 頁において、Talbert の紙媒体による成果の検討の結果、彼がボイティンガー図全体について街道抽出図を作成していないと指摘し (152 頁)、自身でこれを作成 (153 頁) して考察したが、拙稿執筆時点では彼によるウェブサイト上での情報発信内容は検討していなかった。その後、上記のサイトを閲覧・操作した結果、前掲サイトにおいてボイティンガー図全体の街道抽出図が利用可能であることが判明した。それゆえ、拙稿における Talbert に対する上記の指摘は該当しないため、この場を借りて訂正する。ただし同時に、評者自身による作図と比較すると、Talbert による街道抽出図には未抽出部分が存在すると考えられるため、これによって拙稿における Talbert 説批判がすべて無効となったわけではないことも、蛇足ながら付言しておきたい。
- 10) 例えば、R. Talbert, Greek and Roman Mapping: Twenty-First Century, R. Talbert & R. Unger eds., *Cartography in Antiquity and the Middle Ages: Fresh Perspectives, New Methods*, Leiden, Boston, 2008, pp.9-27, esp. pp.25-26; R. Talbert, The World in the Roman Traveler's Hand and Head, J. Tovar, M. Girvés & F. Espelosin eds., *Viajes y Visiones del Mundo*, Madrid / Málaga, 2008, pp.109-128, esp. pp.120-125; R. Talbert, The Roman Worldview: Beyond Recovery?, K. Raaflaub & R. Talbert eds., *Geography and Ethnography: Perceptions of the World in Pre-Modern Societies*, Oxford, 2010, pp.252-272, esp. pp.264-269; R. Talbert, Visions of Travel and Their Realization, *Antiquité Tardive* 24, 2016, pp.21-34, esp. pp.22-27. 本書はこれらの論文に基づき、その内容を発展させたものと考えられる。
- 11) P. Zanker, *The Power of Images in the Age of Augustus*, Ann Arbor, 1988.
- 12) ディールス (1970) 179-180 頁。
- 13) この逸失した 4. アクイレアは、Schaldach (2017) p.91 table 1 には挙示されない。

- 14) ディールス (1970) 180 頁。
- 15) Schaldach (2017) p.87, p.86 fig.III-20.
- 16) Schaldach (2017) p.87, p.86 fig.III-21.
- 17) Schaldach (2017) p.28, p.31 fig.I-8.
- 18) 邦訳：織田武雄監修・中務哲郎訳『プトレマイオス地理学』東海大学出版会，1986 年。
- 19) 中野定雄・中野里美・中野美代訳『プリニウスの博物誌〔縮刷版 I〕』雄山閣，2012 年（初版 1986 年），117-118 頁。
- 20) この点は、著者年来の主張でもある。R. Talbert, Rome's Province as Framework For World-View, L. de Ligt, E. Hemelrijk & H. Signor eds., *Roman Rule and Civic Life: Local and Regional Perspectives*, Amsterdam, 2004, pp.21-37.
- 21) ペトロニウス『サテュリコン：古代ローマの諷刺小説』國原吉之助訳，岩波文庫，1991 年，128 頁。
- 22) ウェーバー (2011) 230 頁。
- 23) Schaldach (2017) p.83. 骨製携帯型日時計：Schaldach (2017) p.85 fig.III-17；Talbert (2017) pp.10-11.
- 24) 例えば，エウポルスのベレキノン（アクイレイア出土）のごとく，固定型日時計に風配図（windrose）が刻字されている例があるが，これは地理的情報ではない。Gibbs (1976) pp.326-327, p.330 plate 53；ディールス (1970) 174-175 頁。
- 25) A. Jones, *A Portable Cosmos: Revealing the Antikythera Mechanism, Scientific Wonder of the Ancient World*, Oxford, 2017, p.241, p.243 Fig 9.3; D. Days, Months, Years, and Other Time Cycles, Jones ed. (2017) pp.95-121. 「アンティキティラの機械」とそれを巡る研究者の人間模様については，J. マーチャント『アンティキテラ：古代ギリシアのコンピュータ』木村博江訳，文春文庫，2011 年。

【付記】本研究は JSPS 科研費 JP17K13561 の助成を受けたものです。